

## 実証研究における知識の役割

小 牧 純 爾

(金沢大学文学部)

まだ知られていない事実が報告された場合、それが確かな現象なのか、またどの程度の一般性をもっているものなのかを明らかにするため、追試実験が行なわれるのが普通である。最初の結果をそっくりそのまま再現するデータが得られることはまずないが、ほぼ同じ結果が報告されることは多い。しかし、はなはだ当惑することだが、結果の再現に失敗した実験や、最初の知見に矛盾する結果を得た実験が同時に発表されることがよくある。

実証研究が完全に事実のみに依拠するとする単純な立場を取るとすると、これは困った状況である。事実そのものが一貫していないのであるから、何が検討すべき問題であるかが判然としないことになるからである。しかし、大抵の実験心理学者はこうした単純な方法論はとらない。最初に報告された現象がもし理論的に意味のある現象であれば、どうすればその現象が確実に生じるのかという条件分析の作業と、その現象の再現性の吟味とを並行して行なうのである。有り体にいえば、確実にどうかはまだ分からない現象について、確実にあることを前提として条件分析にとりかかるのである。

実証研究には、従って、見通しが重要な意味を持つことになる。仮説を立て、問題の現象を規定する要因を予め限定しておかなければ実験のデザインはたてられないからである。この段階では「勘」が物をいうと説く人がいる。私はこの言葉を好まない。また、この言葉は大変な誤解を招くおそれがあると考えている。現象の規定因子について見通しをつける際、研究者がその持てる「知識」をフルに活用している、あるいは、活用せざるを得ないという事情をあいまいにしておそれがあるからである。

結果の再現に成功した実験、失敗した実験、矛盾した結果を得た実験を対比し、被験体、装置、手続き等の違いを列挙してみる。ここまでは素人でも出来る。この次が問題である。違っている条件の内から、結果の違いを産みだす原因になったと思われるものを選び出し、問題の現象に本質的な関連を持つと思われる条件をしぼりこんで、検証可能な仮説をまとめ上げなくてはならない。ここで知識が重要になる。個々の条件が行動にどんな作用をもたらすのか、また個々の条件は他の条件とどんな交互作用を生じるのか、こうしたことについての体系的な知識があってこそ、初めて仮説定立の作業が可能になるからである。

完全な再現性を持たないデータにもとづいて法則性を追求することがあること、いわば、多義性のなかに法則性を見出すことが必要になることがある点で、臨床心理学者は実験心理学者と同じ問題を抱えていると私は考えている。臨床データに適切な理解を加え、個別特殊的な症例の基礎に一定の病理機構を見通して行くためには、私には余り馴染みのないことだが、諸種の心理テストの特異性、言語および動作的表出に関する体系的な知識、それに病因・病理についての経験的および理論的知識等が必要になるのであろうと推測している。実験家であれ臨床家であれ、知識の蓄積と体系化が等しく求められていると考えたい。